

アルプススタンドのはしの方

藪博晶

【登場人物】

安田あすは 東播磨高校三年 演劇部
藤野富士夫 東播磨高校三年 元野球部
田宮ひかる 東播磨高校三年 演劇部
宮下恵 東播磨高校三年 帰宅部

【東播磨ナイン】

1 三宅
2 藤原
3 吉田
4 園田
5 遠藤
6 赤木
7 吉川
8 富田
9 小池

【東播磨ベンチ】

矢野

【東播磨吹奏楽部】

久住智香

【平成実業ナイン】

1 清水
2 林
3 山口
4 松永
5 月岩
6 福内
7 奥成
8 竹森
9 北村

※ SEは最低限、話の進行上不可欠なものだけを記す
歓声や吹奏楽の演奏などは常に聞こえている
アナウンスなども適宜入る

五回裏 守備

SE サイレン

SE カキン (金属バットのヒット音)
明転

甲子園球場のアルプス席

安田と田宮が試合を見ている

宮下が少し離れたところに立っている

安田 「え？今の点入ったん？」

田宮 「え？そうなん？」

安田 「何か向こう側盛り上がってるやん」

田宮 「えー？(スコアボードを見る) 見えへん」

安田 「何で？アウトちやうん？」

田宮 「あ、入ってる。入ってるわ」

安田 「マジで？」

田宮 「うん」

安田 「何で？だって取ったやん。取ったらアウトちやうん？」

田宮 「アウトやと思う」

安田 「やのに何でさ、そこの、そこのさ」

田宮 「三塁」

安田 「三塁の人走ったん。アウトやのに」

田宮 「落としてたら分かるけどな」

安田 「何？」

田宮 「いや、キャッチできなくて、落としてたら、走ってもええやん」

安田 「ああ、そやな。それは分かるわ」

田宮 「・・・落としてたんかな実は」

安田 「今私も同じこと思った。実はな」

田宮 「私には取ったように見えたけど」

安田 「アウトじゃなかったんや」

田宮 「実は落としてた」

安田 「そうや、絶対そうや」

安田・田宮 スコアボードを見る

田宮 「アウトかー」

安田 「あかん、迷宮入りやな・・・」

田宮 「せつかく0点でおさえとったのにな」

安田 「まあしょうがないな」

藤野 入ってくる

藤野 「ここいい？」

田宮 「あ、うん」

安田 「暑」

安田 「何かあるんかな」

田宮 「え？」

安田 「いや、ほら、みんな席立ってどっか行きよるから」

田宮 「ほんまや」

安田 「何やる。みんな中入ってく」

田宮 「・・・ファウルボールが当らんように」

安田 「・・・急に？」

田宮 「うん」

安田 「今まで普通に見てたのに急に？」

田宮 「うん」

安田 「みんな？」

田宮 「うん！」

安田 「何でそんな力強いん。でもまあファウルボール怖いな確かに」

田宮 「当たたら死ぬらしいで」

安田 「マジで？死ぬん？」

田宮 「うん。おじさん言っとった」

安田 「何でおじさんそんなん知ってるん」

田宮 「当たたことあんねんて」

安田 「死んでへんやん」

田宮 「・・・え？」

安田 「おじさんファウルボール当たたのに死んでへんやん」

田宮 「・・・どういうこと？」

安田 「だから。ファウルボール当たたら死ぬはずなのに、おじさん生きてるやろって」

田宮 「・・・ん？」

安田 「何で分からへんの！？だから！ファウルボール当たたら死ぬっていうことはそれに当たたことある

おじさんは死んでなおかしいのに生きてる」

田宮 「おじさんのこと嫌いなん？」

安田 「会ったことないし！」

田宮 「・・・まあでもファウルボール危ないから。私らも避難しよ」

安田 「まあ甲子園なんかで死にたくないもんな」

田宮 「藤野君も避難したほうがええで」

藤野 「グラウンド整備やから」

田宮 「え？」

藤野 「今五回裏終わったとこやろ？六回の表までの間にグラウンド整備入んねん」

田宮 「・・・あ、みんなグラウンド整備に行ってるっていうこと？」

藤野 「違うよ。グラウンド整備で時間開くから、その間にトイレ行ったり飲み物買いに行ったりすんねん」

田宮 「あー。そうなんや。さすが、詳しいね」

藤野 「いや別に」

田宮 「さっき来たん？」

藤野 「うん」

田宮 「遅くない？」

藤野 「補習で」

田宮 「あー」

藤野 「朝学校で補習あって。それ終わってから来たから」

安田 「・・・私間に合ったで？」

藤野 「え？」

安田 「いや、私も補習終わってから来たけど、普通に間に合ったで？」

藤野 「あー・・・」

安田 「私も一緒に補習受けてんねんけど・・・あ、分からへん？」
藤野 「あ、いや、分かるで」
安田 「あーいやごめん、全然別に、ええねんけど」
藤野 「いやいや、分かる分かる」
安田 「大丈夫、うん。大丈夫大丈夫」
藤野 「いや、分かってるで。分かってるから。城之内さんやんな」
安田 「うん。私安田やねんけど」
藤野 「あ、そうか。そうやった」
安田 「いやいや、でも別にそんな、全然」
藤野 「そうやそうや安田さんや、ごめん。そうや、あの髪の毛長い人が城之内さんや」
安田 「うんそれ多分杉元さんやねんけど」
藤野 「あー、そうか」
安田 「いや、でも別に、ごめん」
藤野 「いやー」
田宮 「でも、あれやんな。二人とも大変やんな」
藤野 「え？」
田宮 「いや、補習」
藤野 「あー、まあ」
田宮 「朝から。大変やんな」
安田 「まあ大変っていうか、しんどい」
田宮 「あー」
安田 「しんどいっていうか、みじめ」
田宮 「あー」
安田 「みじめっていうか、虚無感？」
田宮 「どれなん」
藤野 「虚無感を感じたことないけど」
安田 「・・・で、何で来んの遅かったん？」
藤野 「いやー、まあちよつと、迷って」
安田 「ふーん」
田宮 「でも別に道迷うようなとこなくなかった？」
藤野 「いや、来るかどうか迷って」
安田 「そつち？そこ迷ったん？」
藤野 「うん」
安田 「あー、でも確かに私も行かんとこつかなくてちよつと思つた」
藤野 「あ、そうなん？」
安田 「うん。だって嫌やん？夏休みやのにさ。応援行かなあかんとか。なあ」
田宮 「うん。暑いしなあ」
藤野 「あー」
安田 「しかも何で全員強制なん？おかしくない？」
田宮 「まだ一回戦やしね」
安田 「ほんまさあ、何で野球だけ特別扱いするんかな。甲子園、わー、すごい、みたいなさ。高校球児の汗最高みたいなさ。何なんかなあれ」
藤野 「あー・・・」
安田 「あと野球部の人何かえらそうじやない？」
藤野 「まあそれは・・・」
田宮 「藤野君野球部やんな」
安田 「え」
藤野 「今それ言う？」
田宮 「え」
安田 「いや、違うで別に、野球部のこと嫌いとかなそんなんじゃないで」
藤野 「いやいや、分かってる分かってる」

安田 「いやほんまに」
藤野 「いや、大丈夫。ていうか俺もう野球部ちゃうし」
安田 「え？」
藤野 「辞めてるし。だいぶ前に」
安田 「あ、そうなん？でもごめん」
藤野 「いやいや、分かるし。何か偉そうにするやろ。野球部のやつ」
安田 「うん。園田君とか」
藤野 「あー、園田ね」
田宮 「そう？園田君ってピッチャーの人やろ？そうかな？」
藤野 「そうやって」
田宮 「えー、そう？そんなイメージないけどな」
藤野 「ちよっとプロのスカウトに目つけられたぐらいでさ」
安田 「え、そうなん？」
田宮 「すごいやん」
藤野 「いやスカウトとかどこでも見に来んねんから」
田宮 「うん」
藤野 「でもすごいと思うけどな」
安田 「まあ演劇やったら絶対そんなないよな」
藤野 「演劇？」
安田 「ああ、私ら演劇部やねん」
藤野 「あ、そうなんや」
田宮 「確かに演劇でプロからスカウトとかはないやろな」
安田 「全国大会行つてもさ、全員で見に行こうとか絶対ならへんし」
藤野 「あー・・・え、演劇の大会って何すんの？」
安田 「・・・演劇」
藤野 「・・・あー、ああ、でもあれか。一応地区大会とか県大会とかあって」
田宮 「うん」
安田 「そうそう。一応私が台本書いて」
藤野 「へーすごいな。で、全国まで行つたんや？」
安田 「いや、行ってない」
藤野 「え？あれ、さっき全国行ったのにみたいな言つてなかった？」
安田 「いやいや、違う。もし行つたとしても、そんな誰も見に来てくれへんのになーって」
藤野 「ああ、そういうこと」
安田 「でも一応近畿までは行つてんで」
藤野 「あ、そうなん。すごいやん」
安田 「すごいねん」
藤野 「・・・田宮さんどうしたん？」
田宮 「え？ああ、いや、え、何？」
藤野 「いや、近畿大会、すごいなって」
安田 「聞いてなかったん？」
田宮 「いや・・・」
藤野 「それ、今年？」
安田 「いや、去年」
藤野 「今年はこれから？」
安田 「いやー、今年は出えへん」
田宮 「あ」
藤野 「え、何で。受験やから？」
安田 「まあそれもあるし、近畿大会までは秋やねんけど、全国大会は来年の夏やねん」
藤野 「え、何それ」
安田 「何それやろ」

藤野 「出られへんやん」
安田 「そうやねん」
藤野 「・・・不思議な大会やな」
安田 「そう言われたらそうやな」

間

田宮 「あのさ」
安田 「暑・・・え、何？」
田宮 「いや・・・グラント整備長いね」
安田 「うん」

間

安田 席を立つ

田宮 「どこ行くん？」
安田 「いやちよつと飲み物買いに」
田宮 「あ、ほんま？じゃあ私行くで」
安田 「いや、ええよ自分で行くし」
田宮 「いや、ええって私行くから」
安田 「なんでよ、自分で行くって」
田宮 「いやいや、ほんま 私もちょうど買いに行こうと思ってたところやから。ついでに」
安田 「・・・あ、そう。じゃあ」
田宮 「うん。何がいい？」
安田 「何か。お茶系の」
田宮 「分かった」

田宮 出て行くこうとする

田宮 「(宮下に) しんどくない？」
宮下 「え？」
田宮 「座ったら？」
宮下 「いや、いい」
安田 「暑いわー」

田宮 出て行く

安田 「・・・(笑)」
藤野 「？」
安田 「城之内さんて誰なん」
藤野 「え、いや・・・え、おらんかったっけそんな人」
安田 「おらんよ」
藤野 「あー、え、そうやったっけ」
安田 「めっちゃおもしろい」
藤野 「いやー」
安田 「え、藤野君はなんで補習なん？」
藤野 「なんでって、普通に成績悪かって」
安田 「テスト？提出物とか？」
藤野 「まあ両方？」
安田 「あー一緒や」
藤野 「自業自得やな」
安田 「まあしょうがないよな。でも毎日しんどいわー」

藤野 「そやな」
安田 「志望校どこ？」
藤野 「甲南」
安田 「あ、一緒や」
藤野 「ほんま？」
安田 「行けそう？」
藤野 「判定」
安田 「やっぱな」
藤野 「やっぱな」
安田 「私も判定」
藤野 「ああ・・・やっぱな」
安田 「補習受けてるぐらいやもんな」
藤野 「・・・俺ヒガハリ入ったら甲南は普通に行けると思ってた」
安田 「そうやんなー・・・高校三年生の夏ってこんなかなー？」
藤野 「どんななん？」
安田 「なんか、もつとなんか、青春みたいなさ」
藤野 「青春な・・・青春って何？」
安田 「・・・なんやろ・・・まあ、甲子園は青春なんちゃうん？」
藤野 「ああ、なるほど」
安田 「私よう分からんけど」
藤野 「まあ熱気とか、したたる汗とか、辛さを乗り越えてとか、そういうのが青春なんかな」
安田 「でもそんなんサウナもそうやで」
藤野 「サウナ？」
安田 「熱気、汗、辛さを乗り越える」
藤野 「ほんまやサウナや」
安田 「やろ？」
藤野 「いやでも、ほら、真剣勝負な感じとか」
安田 「サウナもたまにガチな人おるで」
藤野 「・・・おるな。でも何か一生懸命な感じとか」
安田 「一生懸命サウナやってる人おるで」
藤野 「おるな」
安田 「あの人たちは何を目指してるんやろな」
藤野 「そうか。じゃあ一生懸命サウナ入ってるおっさんも青春してるんやな」
安田 「そういうことになるな」
藤野 「演劇はさあ、青春じゃないん？」
安田 「うーん、どうやろ」
藤野 「近畿大会出たんやろ？」
安田 「厳密に言うとならない」
藤野 「え？」
安田 「本番インフルエンザかかっててもてき。出れんかってん」
藤野 「え？マジで？」
安田 「マジで」
藤野 「えーそれ、悔しいな」
安田 「まあしょうがないねん」
藤野 「でも脚本も書いてさ、頑張ったんやろ？ちゃんと評価してほしいやん」
安田 「頑張ったけど、でも結果としてさ、上演できんかったら意味ないもん。だから、そこまでのもんや
ってんって」
藤野 「そっか」
安田 「しょうがない」

安田 「暑」
藤野 「ここがもうサウナやんな」
安田 「・・・あー、やっぱり来んかったらよかった」
藤野 「興味ないのに来てもね。面白くないもんな」
安田 「宮下さんとかもよく来たな。絶対来なさそうやのに」
藤野 「宮下さんって？」
安田 「・・・(宮下を指差す)」
藤野 「・・・え？あの人？宮下さんって、あの宮下さん？」
安田 「知ってる？」
藤野 「あの宮下さんやる？学年一位の」
安田 「こないだ初めて二位とったけど」
藤野 「あ、そうなん？」
安田 「智香に負けてん」
藤野 「智香って？」
安田 「久住智香。知ってる？吹奏楽の部長の。(前の方を指さして) あそこ。トランペット持ってる」
藤野 「ああ、あー、多分分かる」
安田 「ほんまに？」
藤野 「うん」
安田 「また城之内さんちゃうやんな」
藤野 「おらんからその人。久住さんが一位やったん？」
安田 「そうそう。めっちゃ喜んでた。初めて宮下さんに勝ったって言うて」
藤野 「へー。すごいな。部活も頑張ってるのに。宮下さんに勝つとか」
安田 「そう。どう思ってるんやろな。高校入って初めて誰かに負けたわけやろ」
藤野 「そうやな。どうなんやろ」
安田 「ちよつと聞いてきてよ」
藤野 「え俺？なんでよ」
安田 「だって宮下さんって何か、話しかけづらいオーラ出てるやん。なんか住む世界違うって言うか、あなたちとは違いますからみたいな感じ？」
藤野 「そう？思い込みちゃうん？」
安田 「あんま他の人とかからんでのんも見たことないし」
藤野 「そうなんや。じゃあ無理やん」
安田 「そうやねん」
藤野 「何なん」
安田 「いや、男子のほうが結構そういうの平気なんかなと思って。チャラ男の人とかさ、結構誰にでも話しかけるやん」
藤野 「ああ・・・何で俺をチャラ男やと思ったん」

六回表 攻撃

安田 「・・・これさあ、正直相手のほうがだいぶ強いよね」
藤野 「そうやろうな。春にも甲子園出てたし」
安田 「向こうの四番の人って何か有名な人なんやろ？」
藤野 「ああ、松永な。めっちゃ有名。春は5本ホームラン打ってるし」
安田 「それってすごいん」
藤野 「すごいよ」
安田 「へー。じゃあ今1-0なんつてすごいんちゃうん」
藤野 「園田おらんかったらもつとボコボコにやられてるやろな」
安田 「あ、やっぱそうなんや」
藤野 「県予選でもあいつ9点しか失点してないし」

安田 「へー」
藤野 「まあすごいわあいつは」
安田 「詳しいね」
藤野 「別に」
安田 「来るかどうか迷ったのに」
藤野 「・・・まあ普通に、友達やったし」
安田 「そうなんや」
藤野 「まあ最近は、あんま喋ってないけど」

田宮 飲み物と食べ物を持って戻ってくる

安田 「おお、おかえり」
田宮 「たがいま」
安田 「めっちゃ買ってるやん」
田宮 「なんか、おいしそうやって。はい（お茶を渡す）」
安田 「ああ、ありがとう。・・・あれ？私お茶って言ったやんな」
田宮 「うん」
安田 「これ・・・黒豆茶」
田宮 「え、何か違うかった？」
安田 「違う、よな（藤野に）」
藤野 「・・・微妙」
田宮 「・・・ごめん。買いなおしてくるわ」
安田 「いやそれはええって」
田宮 「え、でも間違えたから」
安田 「いやいや、間違いではないし」
田宮 「いやでも」
安田 「ええって、ほんまに。ありがとう」
田宮 「ほんまに？ごめんな？」
安田 「うん、ええって」
田宮 「これ、食べる？」
安田 「ああ、ありがとう。いくら？」
田宮 「ええで別に」
安田 「いやそれはあかんやろ」
田宮 「ええって、全然、安かったし」
安田 「いや安いかそんなんじゃないやん」
田宮 「でもほんま、大したことないから」
安田 「じゃあ三百円な。とりあえず三百円だけ渡しとくわ」
田宮 「え？え？でも」
安田 「な、もうあとりあえずこの三百円もらっといて」
田宮 「え、じゃあ四百円」
安田 「言うんやん」
田宮 「いや、ちやうねんもらうんやったらちゃんと」
安田 「ああ、じゃあ、はい」
田宮 「うん、ありがとう」

六回裏 守備

安田 「なんかさー、きっちり三人ずつで終わっていくな。こっちの攻撃」
藤野 「ヒット打たれへんなー」
安田 「向こうのさあ、なに？この辺の守備の人」

藤野 「外野？」
安田 「なんも仕事してないよな」
藤野 「まあボール飛んで来おへんからな」
安田 「これやったらほんまにサウナのおっさんのほうが必死にやってると思うで」
藤野 「そうかもな」
田宮 「何？サウナのおっさんって」
藤野 「青春の象徴」
田宮 「え？」
安田 「外野の人っておる必要あるん？」
藤野 「いや、あるよ」
安田 「でも全然注目もされへんしさ」
田宮 「あー、確かにピッチャーとかばっかり注目されるもんな」
安田 「やんな。なんかポジションによって重要度が違いすぎる気がすんねん。それがおかしいよな。野球
って」
藤野 「まあ、それはそうかもしれないけど、でも外野が注目されるときもあるって」
安田 「どんなとき」
藤野 「・・・」
安田 「ないんやん」
藤野 「あるって。あるある・・・ほら・・・エラーしたときとか」
安田 「最悪やん。エラーしたときしか注目されへんの？」
藤野 「実際一試合のうちに一回もボール飛んで来おへんこともあるしな」
田宮 「えーかわいそう」
藤野 「でもそれ言ったらさ、矢野って分かる？」
田宮 「矢野君？野球部の？」
藤野 「うん。あいつさ、今もベンチに座ってると思うねんけど、試合に出ることなんかないねん」
田宮 「何で？」
藤野 「へたやから」
安田 「はつきり言ったな」
藤野 「いやほんま、全然、センスがないねん。めっちゃ練習すんねんけど、でも全然うまくならへんねん。
才能がないねん」
安田 「めっちゃやディスられるやん矢野君」
藤野 「やのにめっちゃ練習すんねん。やから何か、それ見ると腹立ってくんねんけど」
安田 「どんな感じなん？」
藤野 「どんな感じって？」
安田 「どんな感じにへたなん」
藤野 「え？」
安田 「ちよつとやってみせてよ」
藤野 「え、マジで・・・だから、バッティングとかも、こんな感じやねん（バッティングの動作）」
安田 「ん？」
田宮 「え、うまい人はどんな感じなん？」
藤野 「うまい人？うまい人は、こんな感じ？（バッティングの動作）」
安田 「それうまい人？」
藤野 「うん」
田宮 「矢野君は？」
藤野 「こう（バッティングの動作）」
安田 「うまい人は？」
藤野 「こう（バッティングの動作）」
安田 「違い分からへんねんけど。もうちよつと大きさにやっつてよ」
藤野 「ええ？うまい人は、こう。（バッティングの動作） 矢野は、こう（バッティングの動作）」
安田 「だいで盛ったな」
藤野 「だつて大きさにしろって言うから」

安田 「言ったけど」
藤野 「まあまず俺ピッチャーやから打撃うまくないんやけど」
安田 「じゃあ意味なかったやん今の」
藤野 「うん」
安田 「なんやったん今の時間」
藤野 「意味ないのになーと思いつながらやってた」

SE カキン

藤野 「あっ」
田宮 「え？なに？」
安田 「打たれたん？」
藤野 「・・・あぁー(落胆)」
安田 「え、分かんかった」
藤野 「二塁打」
安田 「あー」
田宮 「今ツアアウト？」
藤野 「ツアアウト」

アナウンス 「4番 サード 松永君」

安田 「え、次松永？」
藤野 「うん」

間

SE カキン

三人 「あ」
田宮 「・・・あ、入った(ホームラン)」
安田 「・・・すご」
藤野 「やられたな」
田宮 「3-0かー」
安田 「まあもうしようがないよな。完全に別世界の人やもん」
田宮 「そうやんな」

安田 席を立つ

田宮 「どこ行くん」
安田 「ごみ捨てに」
田宮 「あ、じゃあ私が代わりに」
安田 「いやええよ自分で行くから」
田宮 「でも」
安田 「それに、あのー、トイレも行きたいし」
田宮 「あ、じゃあ私が代わりに」
安田 「それは無理やん」
田宮 「無理かな」
安田 「・・・無理や」
田宮 「無理か」
安田 「うん」
田宮 「あ、じゃあ一緒にいこ」
安田 「・・・うん」

田宮・安田 ハケる

間

宮下 「園田君って野球以外で何が好きなん？」

藤野 「……え？」

宮下 「……」

藤野 「え、今の俺に言った？」

宮下 「うん」

藤野 「あ……何で俺に聞くん？」

宮下 「だって、野球部やったんやろ？」

藤野 「そうやけどさ……直接聞けばいいやん」

宮下 「え、でも」

藤野 「まあそれさ、よく聞かれるけど……ないと思うで」

宮下 「……ないん？野球以外に好きなもの？」

藤野 「野球のことしか考えてないんちゃうかな……多分」

宮下 「そうなんや」

七回表 攻撃

藤野 「宮下さんさ……このあいだ、テスト二位やったんやろ？」

宮下 「……そやけど？……何か」

藤野 「いや……えっと……一位の人ってどんな人か知ってる？」

宮下 「知らん」

藤野 「え、知らんの？」

宮下 「うん」

藤野 「あ、そう」

SE カキン

藤野 「……ああ(落胆)……」

田宮 戻ってくる

田宮 「ツアーアウト？」

藤野 「ツアーアウト。ランナーなし」

田宮 「厳しいね」

吹奏楽 エル・クンバンチエロ

田宮 「あ、この曲好きやわー」

藤野 「……園田がこの曲好きやねん」

田宮 「あ、そうなん？」

藤野 「だから園田の打順のときはこの曲やねん」

田宮 「そうなん？そんなん決まってるん？」

藤野 「全員じゃないと思うけど。園田は決まってる」

田宮 「ああ……あ、そっか」

藤野 「え、そっかって何？」

田宮 「だって久住さんと園田君付き合ってるやん」

藤野 「え？……」

田宮 「あ……」

藤野 「え、久住さんって吹奏楽の？」
田宮 「いや、ちょっと待って今のなし」
藤野 「マジで、つきあってるん？」
田宮 「ちょっと待って、違う違う」
藤野 「園田が？マジかよ」
田宮 「今のなし今のなし」
藤野 「うわ腹立つ」
田宮 「ほんま、違うから」
藤野 「え、いつから？」
田宮 「いや違うねんて」
藤野 「ほんま腹立つ」
田宮 「いやちょっと待って。ほんまに待って」
藤野 「何」
田宮 「今の、違うから」
藤野 「え、じゃあつきあってないん？」

田宮 口笛をふく

藤野 「わざとらしすぎるな」
田宮 「いや、別に、私何も言っていないから」
藤野 「久住さんと園田君付き合ってるってはっきり言ったやん」
田宮 「いや、それは、だから、久住さんと園田君、どつきあってるって」
藤野 「何それ。そっちの方がいややわ」

宮下 しやがみこむ

田宮 「あれ・・・宮下さん？どうしたん？」
藤野 「宮下さん？」
田宮 「宮下さん？大丈夫？宮下さん？」
宮下 「大丈夫・・・ちょっとめまいがしただけ・・・」
田宮 「こんなとこずっと立ってるからやん」
藤野 「熱中症？」
田宮 「ちよっと一回中入って休も」
宮下 「いや大丈夫」
田宮 「大丈夫ちゃうって。ほら（宮下を肩にかつぐ）」
宮下 「ごめん」

藤野 手を貸そうかどうかウロウロしている

田宮 「藤野君ちよっとそっち持って」
藤野 「うん・・・（かなり遠慮した持ち方をする）」
田宮 「・・・それで大丈夫？ちゃんと支えられてる？」
藤野 「・・・うん」
田宮 「・・・じゃ行こう」

田宮・藤野・宮下 ハケる

七回裏 守備

安田 戻ってくる

田宮 戻ってきて宮下の荷物を持つ

田宮 「あ、あすは」

安田 「え、どうしたん？」

田宮 「宮下さんがちよつと、体調崩して」

安田 「え、大丈夫なん？」

田宮 「大したことないと思うねんけど」

安田 「どこ？私も行くわ」

田宮 「いやいいよ私行くし」

安田 「いやいや、行ってくて」

田宮 「ええつて。座つといて」

安田 「いや」

田宮 「いやほんま」

安田 「・・・あのさあ。そういうのもうやめへん？」

田宮 「え？」

安田 「氣い使つてるん？」

田宮 「いや、別にそんな」

安田 「別にさあ、ええやんもう。半年以上経つてんねんで」

田宮 「いや」

安田 「ひかるのせいちゃうやん。近畿大会出れんかったん」

田宮 「・・・」

安田 「インフルエンザなんかさ、かかるときは誰でもかかるもんやし」

田宮 「・・・でも」

安田 「じゃあ逆にさ、もし私がかかってたら、ひかるは私のせいで出れんかったって思うん？」

田宮 「(首をふる)」

安田 「そうやろ。だからさ、しょうがないねんつて」

田宮 「・・・でもさ、せつかく頑張つたのに」

安田 「頑張つたけどさ、まあ、結局そこで終わる運命やつてんつて。しょうがない」

藤野 戻ってくる

SE カキン

安田 「ひかるもさ、はよ気持ち入れ替えてやつていこうよ。受験勉強とかさ、もっと大事なことあんねんし」

田宮 「・・・」

安田 「やめよな。もう、そういうの、引きずるん」

藤野 「(田宮と目が合う) あ、なんか、飲み物」

田宮 「ああ、あるある」

藤野 「あ、じゃあ俺持っていくわ」

田宮 「いいよ、私いくから」

藤野 「あ、ほんま」

田宮 「うん。藤野君試合見とつて」

田宮 ハケる

藤野 「あ、ランナー出てるやん・・・」

安田 「何かな、向こうは割りとぼんぼんヒット打つよな。こっちは打たれへんに」

藤野 「うん」

安田 「まあそもそも厳しい勝負やもんね」

藤野 「だいぶ」

安田 「こんな田舎の公立の学校がさ、甲子園常連校と戦うつていうのがまずむちやもんね」

藤野 「そうかもな」

安田 「しよがないって思っ受入れなあかんことって、あるよな」
藤野 「うん、あると思う」
安田 「藤野君はなんで野球やめたん？」
藤野 「・・・矢野ってさ、めっちゃ下手やねん、野球」
安田 「ああ、これ（バッティングのポーズをする）やろ」
藤野 「へたやから試合なんか出れるわけない。出れるわけないのに、めっちゃ練習すんねん。で、俺それ見てさ、なんでこんな練習するんやろって思ってた」
安田 「そうやな」
藤野 「俺は・・・俺はさ、ピッチャーやん。だから、園田がおるとき、スタメンで投げれることなんかま
ずないねん。どんなに頑張っても」
安田 「ああ、そっか。そうやな」
藤野 「最初はさ、こいつに負けんように頑張ろって思ってたけどさ、もう全然違うねん。同じ練習しとって
もあいつばかりうまくなんねん」
安田 「腹立つな」
藤野 「うん。それで、俺は野球やめた。矢野は今でも続けてる」
安田 「そうなんや」
藤野 「俺のほうが正しいよな？」
安田 「うん。正しい」
藤野 「そうやんな。三年間練習してさ、試合にも出られへん、誰からも褒められへん、それやったらさ、
その時間別のことやってたほうが有意義やん？」
安田 「勉強とか？」
藤野 「勉強・・・は、やらんかったな・・・何でやろ」

SE カキン

安田 「あーあかん（ランナーが出る）」
藤野 「・・・久住さんはさ、すごいよな」
安田 「え？」
藤野 「すごいよな。吹奏楽の部長やりながら、勉強でも学年一位とって」
安田 「で、園田君とも付き合って」
藤野 「あ、知ってるんや」
安田 「割とみんな知ってると思うで」
藤野 「でもさつき田宮さん、言ったらあかんみたいな感じやったで」
安田 「ああ、私が『誰にも言ったらあかん』って言って伝えたからやと思う」
藤野 「でもみんな知ってるん？」
安田 「うん。私がみんなに言いふらしたから」
藤野 「最低やな！」
安田 「でもすごいよな、部活に勉強に恋愛やで」
藤野 「うん」
二人 「進研ゼミやん」
安田 「そういうのが青春なんかな」
藤野 「・・・あのさあ。園田のこと好きな女子ってさ、絶対、園田君って野球以外何が好きなんって聞いてくんねん」
安田 「そうなん？」
藤野 「それをさ、俺とかに聞いてくんねん。あれさあ、めっちゃむかつくねん」
安田 「そうなんや」
藤野 「ほんまに・・・ほんまに腹立つ・・・宮下さんさあ・・・」
安田 「何？」
藤野 「いや・・・宮下さんさあ、一位が久住さんやって知らんかった」
安田 「そうなん？聞いたん？」
藤野 「うん」

安田 「マジで？智香のこと知らなかったん？」
藤野 「うん」
安田 「え、何それ？さすがに周りに興味なさすぎちゃうん」
藤野 「なんか、可哀想やんな久住さん。せっかく勝ったのに、相手にされてないみたいやん」
安田 「ほんまそれ。めっちゃ喜んでたのに。無視されてるみたいやん」
藤野 「やっぱりばぬけてすこいやつってそうなんやろな。周りの人間とかどうでもええんやろな」
安田 「何それ。何か、むかつく」

田宮 戻ってくる

安田 「あ、おかえり」

田宮 「うん。え、ランナー二人も出たん？」

安田 「うん」

田宮 「やばいやん」

藤野 「宮下さんは？大丈夫なん？」

田宮 「うん。もうすぐ来ると思う」

安田 「宮下さんとさ、何か話した？」

田宮 「うん。普通に。何で？」

安田 「よく話せるな？」

田宮 「え？」

安田 「周りのこと相手にしてないやろあの人。見下してるって言うか」

田宮 「そう？普通やったで？話してみたら」

安田 「うそ。お前らとは違うんやみたいなオーラ出してるやろ」

田宮 「あー、まあ、もともと宮下さん東校落ちてうち来てるらしいから。ヒガハリでは誰にも負けたらあかんみたいや、そういう意識はあったかもしれんけど」

安田 「ほら」

田宮 「でもそれって寂しいと思うねんよ」

藤野 「寂しい？」

田宮 「孤独やん。競い合える人もおらんし、分かってくれる人もおらんし」

藤野 「孤独・・・(マウンドを見る)」

宮下 戻って来る

田宮 「あ、大丈夫？」

宮下 「うん。ごめんな、迷惑かけて」

田宮 「ううん、ぜんぜん」

宮下 「えっと・・・(藤野に) ありがとう」

藤野 「え？いや、俺なんもしてないし」

宮下 「うん。そうやな」

藤野 「・・・」

SE カキン

安田 「・・・ああ！（東播磨のエラー）」

藤野 「落とした！」

田宮 「え、これどうなるん？これどうなるん？」

藤野 「・・・ああー・・・」

安田 「終わったな。もうあかんわ」

田宮 「厳しいね」

藤野 「結局こんなん点取られんねんよな」

安田 「まあしょうがないって」

田宮 「でもかわいそう。エラーした人」

安田 「ほんまにこんなときだけ注目されんねんな」
田宮 「大丈夫かな」
藤野 「大丈夫ではないやろな」
安田 「しようがない」

SE カキン

田宮 「・・・よし（スリーアウトチェンジ）」
安田 「・・・次もう八回？」
藤野 「4-0かー。厳しいな」

八回表 攻撃

安田 「なんか園田君もさ、さすがに疲れてきている感じするよな。特にホームラン打たれたあと」
田宮 「うん。頑張ってるのね。結構打たれて」
安田 「まあしようがないよね。相手のほうが格上やし」
宮下 「あのさ」
安田 「・・・え？私？」
宮下 「しようがないって言うんやめてくれへん？」
安田 「え？」
宮下 「しようがないって言うんやめて」
安田 「・・・なんで？」
宮下 「何か・・・聞いてて気分悪い」
安田 「・・・え別に、関係なくない」
宮下 「頑張ってるやん園田君。なんでそんなふう言うん」
安田 「え、何？怒ってるん？」
宮下 「頑張ってるのにさ、周りで見てる人に勝手にしようがないとか言われたら、嫌やと思う」
安田 「・・・私は言われたけどな」
宮下 「え？」
安田 「私はしようがないって言われたけどな」
田宮 「あすは」
安田 「めっちゃ頑張ってたつもりやった。でも、言われたよ。しようがないって・・・そんな経験ないやろうけどさ。毎回一位とるような人は」

間

SE カキン

藤野 「あ（ヒット）」

歓声

田宮 「・・・なんか、すごい久しぶりにヒット見た気がする」
藤野 「そうやな」
安田 「でも次が続かんかったらしようがない」
宮下 「・・・」
安田 「何？」
田宮 「ちよつと」

アナウンス 「選手の交代をお知らせします。6番、センター赤木君に代わりまして、矢野君」

藤野 「え！」

安田「矢野君？」
田宮「矢野君って、あの矢野君？」
藤野「・・・矢野・・・」
田宮「あ・・・今のバントしようとしたん？」
藤野「そうやるな」
田宮「ああ！・・・あたってたのに」
安田「かわいそうやな」
田宮「え？」
安田「誰かの代わりで急に何万人もの前に出されてさ、バントもできへんって」
田宮「・・・でもさ、何か嬉しそうじゃない？」
安田「え？・・・顔なんか見えへんやろ」
田宮「でも、何か嬉しそうに見える」
安田「あ（バント）」
田宮「やった！・・・走って！走って！」
田宮・安田「・・・あー（矢野アウト）」
田宮「あ、でも、二塁に進んでる」
安田「ほんまや」
田宮「あ、送りバントや。これ多分送りバントや」
安田「あー」
田宮「すごい、送りバントやー。藤野君、矢野君、送りバント成功したで」
藤野「・・・」
田宮「すごいね・・・宮下さん、見てた？送りバント。矢野君」
宮下「え、うん」
田宮「すごいなー」
安田「・・・嬉しいんかな、打席に立つのは」
田宮「そりや嬉しいよ」
安田「バントでも？」
田宮「だってさ、一生懸命頑張ったのに出られへんって、すごい悔しかったと思うねん。それがさ、出れてんで。絶対嬉しい。しかもそこで、活躍して。すごいよね」
安田「・・・」
田宮「あすは」
安田「？」
田宮「もっかいさ、大会出えへん？」
安田「え」

SE カキン

歓声

田宮「あ！やった！（ヒット）・・・行け！（ランナー走る）」

歓声

田宮「やったー！」
安田「一点、取った」
藤野「すげー・・・」
田宮「矢野君のおかげやな！」
藤野「・・・うん」
安田「・・・今年出てもさ、全国行かれへんねんで」
田宮「分かってるよ」
安田「そんなんさ、意味あんのかな。野球だってさ、甲子園目指して頑張るわけやろ？みんな。最初からそれが無理って分かってんのにさ」
田宮「そんなん関係ないよ。私は、あすはともっかい舞台に立ちたいだけ」

安田「……」

間

SE カキン

田宮「あ……あー取られた（フライを取られる）」

宮下「あ、三塁走った」

田宮「え？」

歓声（三塁ランナー、ホームへ）

田宮「え？今の点入ったん？ねえ今の点入ったん？」

宮下「そうなん？」

田宮「何で？アウトちゃうん？」

宮下「あ、入ってる。入ってるわ」

田宮「ほんまに？やった！でも何で？だって取ったやん。取ったらアウトちゃうん？」

宮下「……落としてたんかな実は」

田宮「今私も同じこと思った。実はアウトじゃなかったんや」

宮下「実は落としてた」

田宮「そうや、絶対そうや」

安田・田宮 スコアボードを見る

田宮「アウトかー」

宮下「迷宮入りやな」

SE カキン

田宮「よし！……ああ！おしいー！（アウト）……でも4ー2や！これなら次の回で追いつけるかも」

安田「でも……次点取られたら一緒やで」

田宮「絶対0点で抑えるって」

安田「何でそんな風に言えるん」

田宮「だって頑張ってるやん。私らが勝手にあきらめたらあかんって。な、宮下さん」

宮下「え？」

田宮「園田君やったら0点におさえるよな」

宮下「……うん」

八回裏 守備

田宮「がんばれー！」

SE カキン

田宮「……よし……取れる！……やったー！1アウト！」

歓声

田宮「宮下さんもこっち来ようよ！」

宮下「え？」

田宮「一緒に応援しよ。声出して応援したほうが楽しいよ！」

宮下「え、でも」

田宮「やった！ストライク！ほら、早く（宮下を連れてくる）」
宮下「ちよっと」
田宮「・・・おおー！（ストライク）よし、あと1球！がんばれー！」
宮下「・・・がんばれ」

歓声（ストライク）

田宮「やった！やったね、三振取ったよ！」
宮下「うん」
田宮「すごいね園田君！カッコいいね！」
宮下「うん」
田宮「（安田に）ほら、あと一人やで」
安田「うん。でもさ」

アナウンス「4番 サード 松永君」

田宮「松永！」
宮下「ここで」
田宮「・・・いや、でも、抑えるよ。ね」
宮下「・・・うん」

SE カキン

田宮「ああ！・・・あー・・・ファウル・・・すごい、今、ヒヤッとしちゃった」
宮下「私も」

SE カキン

田宮・宮下「ああ！・・・おおー」
田宮「あー、今ホームランかと思った」
宮下「しよっとずれてたらホームランやったね」
田宮「あー、もう、怖い」
宮下「うん」
田宮「あとストライク一つ」
宮下「・・・でもさ、園田君はもっと怖いよね、きっと」
田宮「え・・・ああ、そっか・・・そんなこと、想像したこともなかった・・・ああ、ボールか」
宮下「これだけの観衆の中でさ、カメラにも映ってさ、怪物みたいなやつを相手にしてるわけやろ。怖いに決まってるよな」
田宮「そっか・・・そうやんな・・・私らと同じ高校三年生やもんな・・・何か、こっから見ると全然別世界の人みたいに見えるけど、そんなことないもんな」
宮下「今どんな気持ちであそこに立ってるんやろう」
田宮「・・・ああ、またボール・・・緊張してんのかな」
宮下「ストライクゾーンに投げるんが怖いんかも」
田宮「打たれるかもって、思うもんな・・・ボール四つになったら、一塁にでるんやんな」
宮下「そう」
田宮「・・・ああ（ボール）・・・でもさ、このさいさ、もう一つボールっていうのもありなんかな」
宮下「わざと歩かせてね」
田宮「そうそう。で次の人を抑えればいいんやもんね」
宮下「うん」
田宮「そうやんな、じゃあ園田君ももしかしたらそう考えて」
藤野「おーい！お前、何のために野球やってんねーん！何のために野球やってんねーん！何のために野球やってんねーん！」

田宮・宮下「・・・」
藤野 「どんな気持ちで立ってるかって、負けたくないって思ってるに決まってるやろ。そういうやっや。
園田は」

間

歓声（ストライク）

藤野 「よっしゃー！」
田宮・宮下「やったー！」
田宮 「0点に抑えたよ！すごいね！」
宮下 「うん！」
田宮 「園田君すごいね！」
安田 「ほんまに松永に勝った」
田宮 「これなら次の回で逆転できるよ」
安田 「・・・中屋敷法仁が『贋作マクベス』書いたんはさ、高三のときやねん」
田宮 「え？」
安田 「ひかる」
田宮 「何？」
安田 「今年はさ、ちゃんと予防接種打つと言ってよ」
田宮 「うん」
安田 「・・・あれ、今の伝わった？」
田宮 「うん」
安田 「今年はこちらと予防接種打つと言ってねって言ってんねんで」
田宮 「うん。受験生やしな」
安田 「伝わってない！え？分からへん？」
田宮 「いや、分かってるって。予防接種やる？だから打つって」
安田 「何で分からへんの！？」
田宮 「何が」
安田 「もういいわ。後で言う」
田宮 「何よ」

九回表 攻撃

SE カキン（ヒット）

藤野 「よし！」
田宮 「え？」
宮下 「いけ」
安田 「間に合え」

歓声

藤野 「よっしゃー！（打者一塁へ）」
田宮 「すごい、いいよ。ほんまにいけるかも」
安田 「うん」

アナウンス「2番 サード 三宅君」

藤野 「続けよー」
安田 「がんばれー」

SE カキン

田宮 「よし！」

安田 「・・・ああ！（アウト）」

藤野 「おっけおっけー！」

安田 「ナイスバツティン！」

アナウンス 「3番 ショート 吉田君」

藤野 「よしいけ」

安田 「頼む・・・ああ（ストライク）」

藤野 「おっけおっけ」

田宮 「落ち着いて」

宮下 「がんばって」

藤野 「・・・ああ（ストライク）」

安田 「大丈夫大丈夫！」

田宮 「打てるよー！」

藤野 「・・・いけ！・・・ああー！（ストライク）」

安田 「おっけーおっけー」

田宮 「いいよー」

藤野 「ナイスファイトー」

吹奏楽 エル・クンバンチエロ

田宮 「あ、この曲すきやー」

アナウンス 「4番 ピッチャー 園田君」

田宮 「園田君！」

宮下 「園田君」

藤野 「ここで回ってくるか、園田に」

安田 「いけー！」

SE カキン

安田 「おお！・・・ああー！」

田宮 「ファウルか」

藤野 「おしいおしい！」

安田 「ちゃんと当たってるもんね」

田宮 「うん。打てる打てる」

安田 「次、次！」

宮下 「がんばれ」

藤野 「打てるよー！」

SE カキン

田宮 「お！・・・ああー！（ファウル）」

藤野 「いいよいいよ！」

安田 「ツーストライク？」

田宮 「うん」

藤野 「バット当たってるよ！打てる打てる！」

安田 「あー、おねがい、打って」
宮下 「がんばれ」
藤野 「・・・もつと声出そうよ！」
安田 「え？」
藤野 「トランペットに負けてるやろ！もつと声出せよ！いいんか！トランペットに負けてて！」
宮下 「・・・がんばれー！園田君ー！」
安田 「頑張れー！」
田宮 「打てー！」
藤野 「いけー！」

SE カキン (ヒット)

藤野 「よし！・・・よっしゃー！(園田一塁へ)」
田宮 「おおお！」
安田 「よし！」
宮下 「やったー！」
藤野 「園田ー！ナイスバッティン！」
田宮 「一、二塁やで！一、二塁！」
安田 「うん！ほんまに追いつけるかも！」

アナウンス 「5番 ファースト 遠藤君」

宮下 「久住智香ー！ナイス演奏ー！」
田宮 「・・・あ、こっち向いた」
安田 「え、ほんまに？・・・(宮下を見て)・・・フツ・・・意外にでかい声出るね」
宮下 「悪い？」
安田 「いや。いい発声してるよ」
宮下 「ありがとう」

SE カキン (ヒット)

藤野 「よし！」
安田 「おお！」
宮下 「やったー！」
田宮 「いけ！」
藤野 「・・・よーし！(打者一塁へ)」
安田 「やったー！」
田宮 「満塁！満塁！」
宮下 「すごい！」
安田 「逆転できる！」
宮下 「いけるよ！」
田宮 「次誰？」

アナウンス 「6番 センター 矢野君」

四人 「矢野ー！」

四人 精一杯の声援

SE カキン

四人 「いけー！」

間（打球を捕られる）

安田「……え？おわった？」

藤野「うん」

田宮「負けたの？」

宮下「うん」

間

誰からともなく拍手

安田「私さ、来てよかった」

藤野「うん」

安田「……ありがとうございます……あ……悔しい」

泣く

サイレン

徐々に暗転

おしまい